

# 国際ビジネス研究における距離

## — 理論的イノベーションが起きているのか —

齋藤 泰浩

桜美林大学ビジネスマネジメント学群

Distance in international business research:  
A theoretical innovation?

SAITO Yasuhiro

College of Business Management, J. F. Oberlin University

キーワード：国際ビジネス、距離、立地選択

### I イントロダクション

「ソーシャル・ディスタンス」という言葉が新語・流行語大賞にノミネートされるほど一般的に用いられるようになるずっと前から、国際ビジネス (IB) 研究では距離が注目されてきた。「距離という概念は IB 研究の中核にある」(Konara & Mohr, 2019: 335) と言われ、「約 30 年にわたって支配的なテーマの 1 つ」(Eden & Nielsen, 2020: 1615) であり、距離研究は「最重要ストリームの 1 つ」(Hutzschenreuter, Kleindienst & Lange, 2016: 160) であって来た。そして「国際経営とは距離のマネジメントである」(Zaheer, Schomaker, & Nachum, 2012: 19) とまで言われる。

IB 研究において距離という概念が最初に用いられたのは Beckerman (1956) まで遡る (Dow, 2017)。だが、IB 研究において距離が現在のようなポジションを占めるようになったのは、国際化プロセスモデルで心理的距離が重要概念として登場し、IB 分野で 1~2 を争う引用数を誇る Kogut & Singh (1988) が文化的距離を測定するための Kogut & Singh 指標 (KSI) を考案し、Shenkar (2001) が「文化的距離再訪」と題された論文を発表してからである。その後も距離という概念およびその操作化をめぐる議論が続いており、*JIM* では 2014 年に IB 研究における距離の概念という特集号が組まれたり、*IJMR* では Hutzschenreuter *et al.* (2016) の「IB 研究における距離の概念: レビューとアジェンダ」が、

そして *JIBS* では Beugelsdijk, Ambos & Nell (2018) の「IB 研究における距離の概念化と測定：繰り返される疑問とベストプラクティスのガイドライン」が発表されるなど枚挙に暇がない。距離の概念から距離を置く必要があるのか (Harzing & Pudelko, 2016) とか、IB 研究における距離研究はターニングポイントにいないのではないかとわれわれに問いかけるのである。

2021 年は Shenkar (2001) が 2011 年に *JIBS* ディケードアワード<sup>1</sup>を受賞してからちょうど 10 年に当たる。理論的なイノベーションも起こりつつあるなか (Zhou & Guillén, 2015)、このように距離が IB 研究にとって重要であるならば、その距離をどのように捉え、どのように測定するのかを考察することはきわめて重要な作業であるに違いない。そこで、本稿では今後の試みのヒントを得るべく、IB 研究において距離の何が問題なのかを整理し、提案されている解決方法を検討することを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。次章では IB 研究における距離研究の歩みを振り返り、第 3 章ではもっとも愛された KSI を批判的に検討するとともに、新たに提案されている ACD と WAD を取り上げ、改良ポイントを整理する。

## II IB 研究において距離はどのように論じられてきたのか

2020 年は IB 研究とは何かを問い直す動きが見られた 1 年でもあった。50 周年を迎えた『国際ビジネス研究雑誌』 (*Journal of International Business Studies: JIBS*) で、Eden & Nielsen (2020) が IB 研究を理解する便利な方法は行列として概念化することだと述べている。列はディシプリンあるいはビジネスの機能分野、行はそれらのディシプリンで典型的にカバーされるトピックである。それゆえ IB 研究は「ディシプリン」列を横断する「国際」行とみなすことができる (図表 1)。

図表 1：国際ビジネス研究とは何かを理解するための行列

	マネジメント	マーケティング	ファイナンス	会計
市場				
企業戦略				
パフォーマンス				
国際	国際経営	国際マーケティング	国際ファイナンス	国際会計

出所：オリジナルは Eden (2008) で筆者作成

彼女たちは IB 研究の領域をすべてのディシプリンの国際的な側面をカバーする大きな傘 (p.1613) と表現しており、複数のセルの合計にせよ大きな傘にせよ、IB 研究における研究課題は多様性を増し、野心的かつ挑戦的なものとなる。その結果、IB 研究には国内ビジネスに焦点を当てた研究とは異なる固有の複雑性が存在し、複雑性こそが IB 研究をもっとうまく捉えるキーワードであると論じている。そして、この複雑性を分析するために IB 研究者が開発してきた 4 つの研究レンズ－違い (difference)、距離 (distance)、

多様性 (diversity)、不均衡 (disparity) - を4つのDと名づけた (Eden & Nielsen, 2020)。このうち本稿で焦点を当てるのは距離であり、その距離が捉えようとしている違いである。もし距離が単に物理的な、地理的な意味での距離であったなら、4つのDの一角を占めることはなかったに違いない。IB研究において距離は国と国の間の違いの総体のメタファーであり (Zaheer *et al.*, 2012; Hutzschenreuter *et al.*, 2016)、心理的距離、文化的距離、制度的距離といった構成概念をIB研究に取り込んできた<sup>2</sup>。違いの程度を表すのに距離を選択したのはIB研究者の気まぐれではないという (Zaheer *et al.*, 2012)。Tobler (1970) の地理学の第一法則によれば、すべてのものは他のすべてのものと関係性を持つが、距離がより近いもの同士の方がより密接に関係がある。距離をメタファーや構成概念として用いることによって、2つの国の間のさまざまな関係を距離に基づく相違性 (類似性) の大小として特徴づけることが可能になったのである。

IB研究では、この距離が、違いがCDBA (costs of doing business abroad) や外国企業であることの不利 (liability of foreignness : LOF) を生むといったネガティブな帰結をもたらすと仮定してきた。LOFとは多国籍企業 (MNEs) のサブユニットを競争劣位に追いやる海外でビジネスを行うコストを意味し、現地企業が負わない追加的コストと広義に定義される (Zaheer, 1995)。根底には外国企業が現地環境を理解することの難しさがある。

## II - 1 IB研究におけるメタファーとしての距離

Beugelsdijk *et al.* (2018) ならびにDow (2017) によれば、距離の意味が地理的な次元を超えて拡張されたのはBeckerman (1956) に始まる。グラビティモデルを用いた同研究では距離が遠くなると貿易量は低下すると考えられた。「経済的距離」の概念は実際の距離ではなく輸送コストと関係があり、航空運賃の低下などによる経済的距離の縮小とは別に「心理的な距離」の存在を示唆したのであった<sup>3</sup>。それは欧州域内の貿易に影響を及ぼす測定されていないファクターで、Dow (2017) は1番目のターニングポイントへ種が蒔かれたと位置づけている。

IB研究でこの心理的距離という概念が用いられるようになったのは、国際化プロセスモデル、いわゆるウプサラモデルである (たとえばJohanson & Vahlne, 1977)。同モデルの特徴は企業の国際化を学習プロセスと捉え、国際化がいつも心理的距離の近い市場からスタートすることを示した点にある<sup>4</sup>。同モデルで心理的距離は海外環境を理解することを困難にする要因と定義され、国際化は本国市場から心理的距離の近い市場から始まり、徐々に心理的距離の遠い市場へ拡張していく。初期の研究は広い距離尺度に非文化変数を組み込んでいたと指摘されるように (Shenkar, 2001)、言語、政治システム、教育水準、産業発展水準などを含んでいた。LOFをオリジンとする国際化プロセスモデルでは、心理的距離が大きくなるほど企業と市場間の情報フローが妨げられ、LOFは大きくなるかと仮定されたのである (Johanson & Vahlne, 2009)。

国際化プロセスモデルが心理的距離の概念をポピュラーにするのに貢献したのは間違いないが、距離概念に対する同モデルの貢献が実証研究で大きな影響を及ぼし始めるのは Kogut & Singh (1988) による KSI の登場以降である。海外直接投資 (FDI) に関する経済理論は産業レベルや企業レベルの変数によってドライブされてきたのに対し、彼らは国レベルの変数、なかでも国の文化に焦点を当てた。国際化プロセスモデルでは心理的距離が本国と進出先国の文化や言語の違いの影響を受けると考えられたものの、文化の違いがいかに参入モードの選択に影響を与えるのか示していないし、統計的なエビデンスも提供していないことから、Hofstede (1980) が創り出した国の文化についての尺度を用いて海外企業による対米進出を対象にして実証研究に取り組んだ。次節で詳述するように、彼らが考案した文化的距離の指標 (KSI) は、参入モード研究のみならず、さまざまなテーマの研究で用いられるようになり、IB 研究において知らないともぐりであるかのような尺度として地理的距離に取って代わることになる (Harzing, 2003)。距離研究は最初の大きなターニングポイントを迎えたのである (Dow, 2017)。

とはいえ、KSI はデビュー直後から距離尺度のデファクトスタンダードのような扱いを受けたわけではなかった。KSI の引用数が急増するのは 2000 年あたりからで、前後の 10 年間で 5 倍以上に跳ね上がった (Cuypers *et al.*, 2018)。契機になったのは Shenkar (2001) であり、2 番目のターニングポイントの始まりである (Dow, 2017)。Shenkar (2001) は、参入モードや海外子会社パフォーマンスに関する研究で一貫した結果が得られていない原因が文化的距離の概念的属性と方法論的属性にあるとして、隠された仮定 (大部分は気づかれないままだが、ロジック的にもエビデンスによっても支持されない仮定) という形で整理した。彼の批判の矛先は文化的距離の尺度 (とりわけ KSI) に向けられているものの、これらの仮定は文化的距離の次元や尺度にかかわる幅広い研究にも当てはまる。同論文のインパクトは *JIBS* ディケードアワードを受賞したことからも自明だが、同論文を引用して文化的違いに対処することはチャレンジングだと知っていると言いながら、舌の根も乾かぬうちに KSI を用いる研究もあるなど期待とは異なっていたようだ (Shenkar, 2012)。皮肉なことに KSI の引用爆発に一役買ったのである。批判を浴びながらも、KSI が引用されたり使用されるようになった理由として、Shenkar (2012) は文化という複雑で目に見えない現象のバリエーションを測定するシンプルな公式を使いたい誘惑に抗えないこと、R&D 集約度のような変数と一緒に回帰分析にぶち込める定量的尺度であること、使われれば使われるほど KSI に与えられる正当性が増したことなどを挙げている。

KSI を考案した 1 人である Kogut たちは KSI の人気の理由を、文化の概念化を国と国の間の距離という概念に拡張したことに求めているが (Cuypers *et al.*, 2018)、Shenkar (2012) はそもそも文化的違いを捉えるメタファーとして距離を用いることに問題があるという結論に至るのである<sup>5</sup>。次節で KSI の問題点を整理する。

## II - 2 KSIの何が問題なのか

KSIはHofstede (1980) の4つの文化次元(権力格差・不確実性回避・男性性/女性性・個人主義)において米国からの各国の偏差に基づくもので、次のように表される。

$$CD_j = \sum_{i=1}^4 \left\{ (I_{ij} - I_{iu})^2 / V_i \right\} / 4$$

$CD_j$  : 米国からの  $j$  国の文化的距離

$I_{ij}$  :  $j$  国の  $i$  番目の文化次元のインデックス

$I_{iu}$  : 米国の  $i$  番目の文化次元のインデックス

$V_i$  :  $i$  番目の文化次元のインデックスの分散

米国への228の参入を対象にした分析の結果、投資企業の本国と進出先国の文化的距離が大きいのほど買取りよりも合併事業(JV)を選択する可能性が高いという仮説は強く支持された(Kogut & Singh, 1988)。企業にとって進出先の国と文化的に離れているほどリスクが大きくなるゆえ、そうした離れた国に進出する際にはリスクの小さいJVを選択しがちであった。

その後、文化の次元としてSchwartz (1994) やGLOBE (House *et al.*, 2004) が使用されたり、制度的距離など文化的距離以外の操作化にもKSI(の計算式)が用いられてきた。つまり、KSIは複数次元の距離という構成概念を計算するのに幅広く応用されてきたのだが、研究者はKSIの限界についてリップサービスで賛同するだけで、今なお使い続けているのが現状であるという指摘もある(Harzing & Pudelko, 2016)<sup>6</sup>。KSIの限界とは何か。

Shenkar (2001, 2012) と同様、距離というメタファーを問題視するBeugelsdijk *et al.* (2018) によれば、距離の概念は2つの要素、すなわち文字通りの距離と違いの集合体である。前者(文字通りの距離・地理的な距離)の特性が対称性、連続性、時間が経過しても安定的であるのに対して、後者(メタファーとしての距離=違い)は非対称性、非連続性、時間の経過とともに変化し得る、という特性がある。

対称性とは距離が満たすべき3つの属性のうちの1つであり<sup>7</sup>、通常AからBまでの距離とBからAまでの距離は等しい。しかし、メタファーとしての距離となると非対称になる。日本企業が米国に進出する場合の文化的距離と米国企業が日本に進出する場合のそれは必ずしも等しくないのである<sup>8</sup>。Shenkar (2001) も指摘していた対称性の幻想であり、メタファーとしての距離の非対称性についてはO'Grady & Lane (1996) が心理的距離のパラドックスと呼んだことでも知られている。なぜ非対称になるのかといえば、知覚あるいは主観性と客観性という問題と企業レベルの要因=分析レベルの問題がある。

知覚の問題をめぐっては、Dow (2017) とMaseland, Dow & Steel (2018) がコールマンのポート(Coleman, 1994)をIBにおける距離研究に適用して説明を試みている。彼

らが示したかったのは国レベルの文化の違い ( $A_c$ ) と企業がとる行為 ( $D_f$ ) の関係が個人の知覚 ( $B_i$ ) や特定の行為への選好 ( $C_i$ ) の連鎖を経て成立している点である。意思決定は究極的に個人で下されるものであり、規模の大きなトップマネジメント・チームであっても国の人口の平均的な特徴を反映すると仮定することには無理がある (Dow, 2017)。KSI が支配する大半の距離研究は  $A_c \rightarrow D_f$  に注目しており、距離の知覚がいかに形成され ( $A_c \rightarrow B_i$ )、距離の知覚がなぜ特定の行為の選好に影響を及ぼし ( $B_i \rightarrow C_i$ )、特定の行為に対する個人の選好が企業の実際の行為をいかに決定するか ( $C_i \rightarrow D_f$ ) を無視していると批判している。

距離研究に意思決定の責任を究極的に負うマネジャーを再統合することを将来の研究に対する提案の核心に据えた Hutzschenreuter *et al.* (2016) によれば、距離の尺度の分析レベルをめぐって、国の特性の客観的な違いに基づく国レベルで把握すべしという意見 (多数派) と国の特性の知覚の違いに基づく個人レベルで把握すべしという意見が存在する。後者は説得力があるとはいえ、知覚が安定的でもなければ、企業内で同質的でもない (メンバーが同じ知覚ではない) ため困難である。さらに知覚された距離の概念化や測定には、意思決定に直接関与している最適なマネジャーの、意思決定を下す直前のような最適な時点での知覚を把握する必要がある (Dow & Karunaratna, 2006)。この2つの最適さを達成することの難しさが個人レベルの研究が160本中32本にすぎない原因の1つになっている (Hutzschenreuter *et al.*, 2016)。<sup>9</sup>

連続性／非連続性に関しては、Beugelsdijk & Mudambi (2013) が国境の影響に注目し、距離は連続尺度を持つ概念であるのに対して、LOF や CDBA は離散的な国境効果であり、国境効果と距離効果を区別すべきと主張している。また、Aguilera, Flores & Kim (2015) は地域間のボーダーが離散的な断続点を構成するので、国際化する企業が直面する空間効果には立地間の違いから生じる空間的異質性の連続的かつ漸次的な増加である距離効果に加え、国境を越える際に生じる CDBA の非連続的な急増である国境効果、さらには地域ボーダーを越える際に CDBA が急増する地域ボーダー効果があると論じている。なお、新興国では国内の地域間異質性が高い傾向があり (Chan, Makino & Isobe, 2006)、非連続性は国境だけでなく、(進出先) 国内でも生じる可能性もある。

安定性については、Shenkar (2001) も安定性の幻想と呼んでいた問題である。周知のように、Hofstede のデータは1967～1973年に40カ国のIBMの社員延べ7万人超から収集したデータに基づいており、現在も入手可能である (<https://www.hofstede-insights.com/>)。彼は「国の文化は変わらない」(<https://hi.hofstede-insights.com/national-culture>) と言うのだが、文化的距離の次元が変化しないという仮定、KSI で用いられるスコアが時間が経過しても安定しているという仮定は現実的ではない。マクロレベルで収斂していなくても、ミクロレベルでは距離を縮めている可能性もある。Tung & Verbeke (2010) はミクロレベル研究において文化的距離の次元・尺度の影響を評価する際に企業レベルの特徴を考慮しないことを問題視している。たとえば台湾に進出した米系企業が、台湾で生まれ育ち、

台湾の人的ネットワークを維持したまま米国の大学院を修了した後に米国企業で働いた台湾人マネジャーを雇う場合、台湾進出時に距離に伴う困難は軽減されるかもしれない<sup>10</sup>。文化の変化がいくらゆっくりだとしても KSI は相変わらず古いデータを使い続け、企業レベルの特徴を考慮しない。Shenkar (2001) の 9 番目の仮定、企業の経験にかかわらず文化的距離の影響は同質であるという批判である (マスク 3)。さらに KSI では本国が固定されているため、いくら国際経験を積んでも基準点は変わらない。すなわち (文化的) 距離は安定しているのである。

KSI には他にも、それぞれの文化的次元が持つインプリケーションは等しくないので相対的な重みを考慮すべきであるとか (Yeganeh, 2011)、4 次元をまとめる集合構成概念 (aggregate construct) であることに疑問が投げかけられ (Beugelsdijk *et al.*, 2018)、次元をコンバインすべきではないといった批判がある (Maseland *et al.*, 2018)<sup>11</sup>。新興国のように国内の異質性が高い場合、KSI のような平均ベースの文化的距離尺度は実際の文化的距離を過大評価してしまうことになるとか (Beugelsdijk, Maseland, Onrust, van Hoorn & Slangen, 2015; Tung & Verbeke, 2010)、次元間に相関があると最終的な指標に過度の影響を及ぼすかもしれないといった指摘もある (Shenkar, 2001)。

以上のように、KSI はさまざまな問題を抱えている。これらの問題をクリアできるような新たな指標の開発を目指す、上述した最適さの実現の難しさもあるゆえ、われわれも客観的な国レベルの違いで距離を捉える。非対称性、非連続性、安定性については改善を試みるとともに、企業間の異質性にも配慮したい。たとえば HOYA は眼鏡レンズの事業本部を 2009 年にタイに移転し、現在では眼鏡レンズを含むビジョンケア・カンパニーのグローバル本社をタイに置き、医療用眼内レンズの事業本部を 2011 年にシンガポールに移転している。HOYA にとってのタイやシンガポールとの文化的距離がタイ企業やシンガポール企業にとっての日本との文化的距離と等しいとは考えにくい。国際化経験や国際化の経路は企業によって異なり、それらが距離に影響を及ぼすに違いない。事業本部を日本に置いたままの日本企業と HOYA で、タイやシンガポールへの文化的距離は同じだろうか。HOYA にとっての基準点は日本のままなのだろうか。事業本部でなくても、過去にタイやシンガポールへの進出経験の有無によって文化的距離は異なるのか。いくつかの試みが提案されている。

### Ⅲ 基準点を本国から移動する

距離を測定するには 2 つの点が必要である。終点は進出先の国だとして、伝統的に IB 研究において距離研究は基準点として本国を想定してきた。理論的な根拠になっているのは本国効果 (Country of Origin Effect) (Elango & Sethi, 2007) とインプリンティング理論 (Zhou & Guillén, 2015; Garcia-Canal *et al.*, 2018) である。前者は文化的価値と制度的規範、国の経済的・物的資源と産業能力、政府の経済政策および産業政策といった 3 つの要素が

ら構成され、これらの要素はその国を出自とする企業すべてに影響を及ぼし、戦略選択等において他の国を出自とする企業との違いを生むと考える(同一国内の企業間に違いがあることは認めつつも、それ以上に他国の企業との違いの方が大きいと考える)。後者はとりわけ創業時や立ち上げ初期段階のような影響を受けやすい時期に環境から戦略や組織構造に受けた影響が長く持続すると考え、本国効果のルーツにもなっている。本国効果を否定するつもりはないが、国際化が進んでも基準点は本国のままでよいだろうか。また、本国が同じ2つの企業が同じ国に進出するとして、直面する距離はいつも同じなんてことがあるだろうか(Hutzschenreuter *et al.*, 2016)。

国際化プロセスモデル以来、過去の国際経験はMNEsの成功における重要なファクターの1つと考えられてきた。しかし、本国と過去の進出先国の(文化的な)違いは過去のFDIから誤った推論を引き出す可能性を高め、他方で過去の進出先国とこれからの進出先国の(文化的な)違いが過去の経験を誤って適用する可能性を高める(Zeng, Shenkar, Song & Lee, 2013)。そうした過去の経験の重要性を鑑みれば、本国から海外へ踏み出した後の国際化の足跡を踏まえて基準点を設定した方がよさそうである。

本社(HQ)が国際的に分解されてきている点も基準点の再考を迫る一因となっている。かつてはHQと海外子会社の距離はダイアドであり比較的素直に測定できたが、HQの分解によりコーポレートHQ(CHQ)と海外子会社間の距離は複雑になる(Baaij & Slangen, 2013)。進出先の国で価値連鎖に沿って活動が広がる多様な海外子会社をうまく調整する手段を提供する現地本社(HCHQ: host-country headquarter)はCHQと当該国の子会社とのブリッジ役となっており(Ma, Delios & Yu, 2019)、HCHQの存在もまた基準点の再考を促している。

企業の国際化の経験が蓄積され、多様な国にCHQやHCHQも含めさまざまな活動のポートフォリオを開発するにつれ、本国と新しく進出する国との距離は当該企業が対処しなければならないもっとも妥当な距離ではなくなっている(Hendriks *et al.*, 2017)。本国以外の基準点は将来の研究への提案の1つと位置づけられている(Tung & Verbeke, 2010; Zaheer *et al.*, 2012; Hutzschenreuter *et al.*, 2016)。そうした発想を持つ尺度は2つある。ACDとWADである。

### Ⅲ-1 ACD (added cultural distance)

国際拡張に関連する主な困難は、新たな進出先の国のコンテキストと本国との距離ではなく、当該企業がすでに活動している環境との距離に起因する(Hutzschenreuter, Voll & Verbeke, 2011)。国際拡張において企業が直面する複雑性は新たに進出する国と過去に進出してきた国々との間の文化的距離に依存する。なぜなら、新しい文化状況がすでに経験してきた文化状況とあまり似ていない場合、過去の活動を通じて蓄積された経験が現地での知識吸収プロセスに役に立たないからである。

そこで考案されたのが追加された文化的距離(ACD)である(Hutzschenreuter & Voll,

2008)。ACDは「国際化する企業が所与の期間に自社の国ポートフォリオに追加する文化的距離の合計」(Hendriks *et al.*, 2017: 2)と定義される。自己記録を更新していくイメージであり、それまでの自社の文化的距離の最高到達点が新たな海外進出によってどれだけ伸びたのかというイメージに近い。したがって、海外子会社を新設するとしても、過去に進出済みの国であれば文化的距離は追加されない。その国に進出することに伴う複雑性の増大に対処する技量は損なわれない(あるいは進出経験があるため複雑性は増大しない)とみなすのである。初めて進出する国であっても、過去にその国と文化的距離が近い国に進出しているかもしれない。新設された海外子会社が立地する国と、本国も含めた既存の海外子会社が立地する国のなかで進出先国にもっとも近い国との文化的距離が「追加される」のである。ACDの算出方法はシンプルで、新設された海外子会社が立地する国について既存の海外子会社すべてが立地する国との距離を計算し、もっとも小さな距離をとる。もっとも近いお隣りさんアプローチ(the closest neighbor approach)と呼ばれる所以である(Hutzschenreuter & Voll, 2008)。お隣りさん=文化的にもっとも近い国こそが文化的知識の源泉であり(Barkema *et al.*, 1996)、国際化の経験によってはKSIよりも文化的距離が小さくなる可能性がある。なお、新設海外子会社が立地する国と既存の海外子会社のすべてが立地する国との距離を計算する際にHutzschenreuter & Voll(2008)らが用いているのはKSIである。<sup>12</sup>

### Ⅲ-2 WAD (time-weighted average distance)

Zhou & Guillén (2015)は、MNEsが時とともに経験を重ねるにつれて本国以外での事業経験から影響を受けるようになるというホームベース効果を示した。前述したように、本国効果やインプリンティング理論が基準点を本国に据える根拠の1つになっているのに対して、ホームベース効果は制度理論に依拠する。制度環境を組織特性の主要な決定要因とみなす制度理論(DiMaggio & Powell, 1983)は、制度環境の影響に着目する点ではインプリンティング理論と同じだが、創設時など初期段階に限定せず、成長していく過程でも影響を受け続けると考える。変化する制度環境に晒されるなかで環境に適応すべく学習していくという組織学習理論(Levitt & March, 1988)とも軌を一にし、経験を重ねるにつれ操業する国々の影響をますます受けるようになる(Zhou & Guillén, 2015)<sup>13</sup>。

国際化の歩みにより基準点が本国から離れる点でACDと同じだが、ホームベースは企業がある時点まで事業経験を蓄積してきた国の組み合わせ(本国を含む)であるため、(最高到達)点というより面である。国際化の足跡、すでに操業している国の数と多様性次第で企業は異なる距離、LOFに晒されることになる。ACDとの最大の相違点は、それぞれの国で事業展開する時間の長さを国際経験の主要な次元として採用している点である。ある国で操業する時間が長いほどその国に関する経験的知識をより獲得する傾向がある。われわれが旧型「ダイナミックLOF」に分類したZaheer & Masakowski(1997)では事業経験の長さが鍵となっていた(齋藤・竹之内, 2017)。海外からの参入企業はその国での事

業が長くなるにつれて新しい環境について学習していくことにより、進出当初その国での経験の欠如のために直面した困難は消滅するだろうし、他方で受入国側も学習プロセスと正当化プロセスが働き、外国企業をより受け入れるようになる。この企業側のファクターと受入国側のファクターの双方がLOFを時間の経過とともに低減していくわけである。その国での操業年数をホームベース内の当該国の重要性を決定するウェイトとして採用し、それらの国々と進出先国との間の距離を重みづけして測定する。ホームベースは純粋な国内企業の場合は本国と同義だが、国際化を進めた企業の場合は大きく異なる。距離は外生変数ではなく、動的かつ能動的に、内生的に捉えられるのである。

Berry *et al.* (2010) と Zhou & Guillén (2015) の WAD の計算式は以下の通りである。

$$WAD_{ikt} = \sum_{j=1}^J \left( D_{jk} \times \frac{A_{jt}}{T_t} \right)$$

$WAD_{ikt}$  :  $t$  年に  $k$  国に進出する企業  $i$  の時間で重みづけした平均距離

$D_{jk}$  : 進出先の国 ( $k$ ) と  $t$  年以前に当該企業  $i$  がすでに投資 (進出) している国 ( $j$ ) との間のマハラノビス距離

$A_{jt}$  : 時間の重みづけ 企業  $i$  が  $t$  年より前に  $j$  国で事業を展開してきた年数

$T_t$  : 企業  $i$  が  $t$  年より前に事業を展開してきた国  $\times$  年数の合計値

267社の中国企業による738の立地選択が、本国と進出先国の距離よりもホームベースと進出先国との時間で重みづけした距離により強く影響を受けることが発見された (Zhou & Guillén, 2015)。

$j$  国における事業経験といっても、販売、生産、研究開発など活動はさまざまである。また単独か合弁かといった参入モードによる違いもある。さらに、現地市場で積んだ経験から獲得した知識は時間とともに陳腐化したり忘れられていく可能性がある (Argote *et al.*, 1990)。そこで、経験の減耗、忘却の可能性を考慮に入れるべく用いられてきたディスカウントファクター (Baum & Ingram, 1998) を加える。 $j$  国における同じ2年の事業経験でも10年前と5年前では経験がもたらす意味は異なると考えられるが、過去のある一時期のみ事業展開しているケースより (撤退など) 現在まで継続しているケースが多いと予想される。したがって、蓄積されていく経験、経験の内容、参入モード、撤退も含む経験の減耗などを考慮した尺度を考案する。

#### IV 残された課題

ソーシャル・ディスタンスはとった方がいいのだが、本稿で論じてきた距離は大きくなるほど困難を伴うと考えられてきた。IB研究やMNEs研究の根本的な仮定となってきた

LOFの源泉が距離に他ならない(Zaheer, 1995)。距離が近いことが、似ていることが良いことだ。国際的な相互作用に関するIB研究の大半のリサーチクエスチョンや仮説はホモフィリイ(homophily)、すなわち人間は自分と似た人と一緒にいることを好む、や心理的距離といった概念によって導かれてきた(Shenkar(2001)の仮説8=マスク2)。共通性は理解を増し相互作用を容易にするのである。違うこと=多様性が創造性を高めるといったベネフィットをもたらす得ることも今さら言うまでもないが(Zaheer *et al.*, 2012)、われわれはIB研究の伝統に倣い、距離がLOFを生むという立場に立つ。

本稿で見えてきたように、距離研究はACDやWADの登場により3番目のターニングポイントを迎えている。とりわけZhou & Guillén(2015)が提示したホームベース概念によって大きな転換が起きつつある。LOFは本国からの距離でなくホームベースからの距離として再定義され、LOFは与件ではなく、国際化の歩みによって異なってくるという動態的な概念として捉え直された。ただ、理論的イノベーションを創出するにはさらなる改良が必要であろう。前章で挙げた蓄積されていく経験、経験の減耗、経験の内容、参入モードに加え、非連続性問題については文化ブロック(Ronen & Shenkar, 1985)の導入も検討したい。文化ブロックを用いてどのような学習の立地経路が成功するかを考察したBarkema *et al.*(1996)は、新しく進出する国の文化的コンテクストが以前進出した国の文化に似ていれば学習効果は強力であるとの仮定の下、オランダ系MNEs20社を対象にした分析を通じて、経験からの学習効果の強さは同じ国での経験>同じ文化ブロック内の他国での経験>本国が近い文化ブロックでの経験であることを明らかにした。国だけでなく文化ブロックにもボーダーがあり、断続性を作り出していよう。非連続性をどのように距離尺度に組み込むかも今後の課題である。

新型コロナウイルス感染症が第6波で収束することを祈りつつ、IBにおける距離研究の第4のターニングポイントに向けてわれわれは新たな距離尺度を考案していく予定である。

**謝辞：**本研究はJSPS科研費18K01846の助成を受けたものです。

## 注

- 1 *JIBS*のディケードアワードは、*JIBS*に過去10年間で掲載された論文のうちもっとも影響力のあった論文に与えられる。(https://aib.msu.edu/awards/jibsdecade.asp)
- 2 メタファーは抽象的でわかりにくい対象を具体的でわかりやすい対象に見立てる。古くからあるこの知の技法は、複数の概念の間に直感的な類似関係を設定することにより、論理的矛盾や感覚的な異質性を産みだし、さらなる探求の糸口になる(『組織科学』1999年第3巻第1号の巻頭言)。組織や経営に関する理論はすべて暗黙のイメージあるいはメタファーに基づいているとも言われる(Morgan, 1998)。
- 3 Beckerman(1956)が経済的距離は対称ではない(非対称性)とすでに指摘していたことは興味深い。アイルランドにとって英国はもっとも近い国だが、英国にとってアイルランドは必ずし

- ももっとも近い国ではない。アイルランドの輸入ランキングで英国は上位に位置する一方、英国の輸出先の上位にはアイルランドより地理的には遠いけれど英国にとってより「近い」フランスがランクインしていたのであった。
- 4 スウェーデン企業を対象にした観察から生まれた同モデルは当時確立されていた経済学や規範的なIB研究に異を唱えた。従来の研究は市場特性に基づくコストやリスクを分析し、自社の資源を考慮することによって最適な参入モードを選択すべきだと指摘したのに対し、初めは輸出、次にエージェントなど仲介者を通じた参入、売り上げが増すにつれて販売子会社などを自社で設立し、成長がさらに続くなら現地生産をスタートするという国際化パターン (*establishment chain* と名づけられた) を示した。
  - 5 かくして Shenkar (2012) は距離メタファーを捨てて「フリクション」メタファーに置き換えることを提案した。摩擦は大きいと熱や抵抗を生み、小さいとスリッパする。摩擦はプラスにもマイナスにもなるニュートラルな言葉だからである。Shenkar (2001) ですでに登場していたが、ポピュラーなメタファーになっているとは言い難い。
  - 6 たとえば Elmoez, Zorgati & Alessa (2021) は、サウジアラビアという研究対象としてめずらしい国へのFDIを対象に文化的距離と参入モードの関係を研究している。文化的距離については、「広く用いられてきたKSIで操作化した」(p.271) というお決まりの理由が述べられているだけである。とはいえ、われわれも批判できる立場ではない。
  - 7 そもそも距離は以下の3つの属性を満たす正の数のセットである。※非負性： $d(u,v) \geq 0$  ①同一性： $d(u,v) = 0$  (for  $u=v$ )、②対称性： $d(u,v) = d(v,u) > 0$  (for  $u \neq v$ )、③三角不等式： $d(u,v) \leq d(u,w) + d(w,v)$  (for  $w \neq u,v$ ) (Cuyper *et al.*, 2018)。
  - 8 KSIが対称性を仮定していると批判するのが Yeganeh (2011) である。彼はKSIがA国とB国の文化次元の差を二乗して計算しており、これは文化的距離が対称だと仮定しているからだと言っている。2つの国の間の文化的距離は非対称の特性を示す正負の符号で示されるべきだとして、KSIより多くの概念的・操作的優位性を持つという計算式を紹介している。他方、Konara & Mohr (2019) はKSIがユークリッド距離を二乗しているため、KSIを用いた研究が検証しているのは二乗した文化的距離の影響であり、三角不等式の条件を満たさないと批判している。
  - 9 この点については Kogut & Singh (1988) も自覚しており、「企業レベルで文化特性を測定する尺度が望ましいことは疑う余地もない」(p. 427) と述べている。しかし、企業レベルで測定することは本研究では不可能であり、組織の意思決定を予測するためにKSIのような国レベルの指標を用いることの限界を自ら認識しているのであった。
  - 10 文化的距離を知覚するのは個人なのに、尺度はマクロレベルだという点とも関連する (Beugelsdijk *et al.*, 2015)。KSIでは米国と中国の文化的距離は2.94で、個人主義のスコアの差は71ある。しかし、上海の個人主義のスコアは中国全体の平均よりかなり高いと予想されるうえ、上海に進出した米国企業がより個人主義的な上海人を採用すれば文化的距離はずいぶん小さくなるに違いない。平均ベースの尺度には問題があるのである。
  - 11 Kogut & Singh (1988) も4次元版のKSI (仮説1) と不確実性回避のみ (仮説2) に分けて検証している。
  - 12 彼らのロジックは、追加された文化的距離が複雑性を増す→複雑性に対処する技量は限られている→うまく対処できる時間単位当たり複雑性の量が限られているため一定量の複雑性を超えると上手く対処できずパフォーマンスが低下する。1年あたりのACDや5年平均のACDを計算するのはそのためである (Hutzschenreuter & Voll, 2008)。
  - 13 ホームベースは企業が主要国でプレゼンスを持つMNEになった後でさえ本国が影響を及ぼすという極端な考え (本国効果やインプリンティング理論) と、真のグローバル企業にとって本国

はもはや重要ではないという同じく極端な考えの妥協案なのだという (Zhou & Guillén, 2015)。

## 参考文献

- Aguilera, R.V., Flores, R. & Kim, J. (2015) Re-examining regional borders and the multinational enterprise. *Multinational Business Review*, 23 (4): 374-394.
- Argote, L., Beckman, S.L. & Epple, D. (1990) The persistence and transfer of learning in industrial settings. *Management Science*, 36 (2): 140-154.
- Baaij, M.G. & Slangen, A.H.L. (2013) The role of headquarters–subsidiary geographic distance in strategic decisions by spatially disaggregated headquarters. *Journal of International Business Studies*, 44 (9): 941-952.
- Barkema, H.G., Bell, J.H.J. & Pennings, J.M. (1996) Foreign entry, cultural barriers, and learning. *Strategic Management Journal*, 17 (2): 151-166.
- Baum, J.A.C. & Ingram, P. (1998) Survival-enhancing learning in the Manhattan hotel industry, 1898-1980. *Management Science*, 44 (7): 996-1016.
- Beckerman, W. (1956) Distance and the pattern of intra-European trade. *The Review of Economics and Statistics*, 38 (1): 31-40.
- Berry, H., Guillén, M.F. & Zhou, N. (2010) An institutional approach to cross-national distance. *Journal of International Business Studies*, 41 (9): 1460-1480.
- Beugelsdijk, S., Ambos, B. & Nell, P.C. (2018) Conceptualizing and measuring distance in international business research: Recurring questions and best practice guidelines. *Journal of International Business Studies*, 49 (9): 1113-1137.
- Beugelsdijk, S. & Mudambi, R. (2013) MNEs as border-crossing multi-location enterprises: The role of discontinuities in geographic space. *Journal of International Business Studies*, 44 (5): 413-426.
- Beugelsdijk, S., Maseland, R., Onrust, M., van Hoorn, A. & Slangen, A. (2015) Cultural distance in international business and management: from mean-based to variance-based measures. *The International Journal of Human Resource Management*, 26 (2): 165-191.
- Coleman, J.S. (1994) *Foundations of Social Theory*. Harvard University Press.
- Cuyper, I.R.P., Ertug, G., Heugens, P., P M A R, Kogut, B. & Tengjian Zou, T. (2018) The making of a construct: Lessons from 30 years of the Kogut and Singh cultural distance index. *Journal of International Business Studies*, 49 (9): 1138-1153.
- DiMaggio, P.J. & Powell, W.W. (1983) The iron cage revisited: Institutional isomorphism and collective rationality in organizational fields. *American Sociological Review*, 48 (2): 147-160.
- Dow, D. (2017) Are we at a turning point for distance research in international business studies? In van Tulder, R., Puck, J. & Verbeke, A. (Eds.), *The Cost and Value of Distance in International Business Research*, (Progress in International Business Research, 12: 47-68) Emerald.
- Dow, D. & Karunaratna, A. (2006) Developing a multidimensional instrument to measure psychic distance stimuli. *Journal of International Business Studies*, 37 (5): 578-602.
- Eden, L. (2008) Letter from the Editor-in-Chief. *Journal of International Business Studies*, 39 (1): 1-7.
- Eden, L. & Nielsen, B.B. (2020) Research methods in international business: The challenge of complexity. *Journal of International Business Studies*, 51 (9 Special Issue: 50th Anniversary Issue, Part 2): 1609-1620.
- Elango, B. & Sethi, S.P. (2007) An exploration of the relationship between country of origin (COE) and the internationalization-performance paradigm. *Management International Review*, 47 (3): 369-392.
- Elmoez, A., Zorgati, I. & Alessa, A.A. (2021) Cultural distance and corporate internationalization: Evidence

- from emerging economies, *Journal of Asian Finance, Economics and Business*, 8 (3): 267-275.
- García-Canal, E., Guillén, M.F., Fernández, P. & Puig, N. (2018) Imprinting and early exposure to developed international markets: The case of the new multinationals. *Business Research Quarterly*, 21 (3): 141-152.
- Harzing, A-W. (2003) The role of culture in entry mode studies: From negligence to myopia? *Advances in International Management*, 15: 75-127.
- Harzing, A-W. & Pudelko, M. (2016) Do we need to distance ourselves from the distance concept? Why home and host country context might matter more than (cultural) distance. *Management International Review*, 56 (1): 1-34.
- House, R., Hanges, P.S., Javidan, M., Dorfman, P.W. & Gupta, V. (Eds.) (2004) *Culture, Leadership and Organizations: The GLOBE Study of 62 Societies*. SAGE.
- Hutzschenreuter, T., Kleindienst, I. & Lange, S. (2016) The concept of distance in international business research: A review and research agenda. *International Journal of Management Reviews*, 18 (2): 160-179.
- Hutzschenreuter, T. & Voll, J. (2008) Performance effects of 'added cultural distance' in the path of international expansion: the case of German multinational enterprises. *Journal of International Business Studies*, 39 (1): 53-70.
- Hutzschenreuter, T., Voll, J. & Verbeke, A. (2008) The impact of added cultural distance and cultural diversity on international expansion patterns: A Penrosean perspective. *Journal of Management Studies*, 48 (2): 305-329.
- Johanson, J. & Vahlne, J.-E. (1977) The internationalization process of the firm: A model of knowledge development and increasing foreign market commitments. *Journal of International Business Studies*, 8 (1) : 22-32.
- Johanson, J. & Vahlne, J.-E. (2009) The Uppsala internationalization process model revisited: From liability of foreignness to liability of outsidership, *Journal of International Business Studies*, 40 (9): 1411-1431.
- Kogut, B. & Singh, H. (1988) The effect of national culture on the choice of entry mode. *Journal of International Business Studies*, 19 (3): 411-432.
- Konara, P. & Mohr, A. (2019) Why we should stop using the Kogut and Singh index. *Management International Review*, 59 (3): 335-354.
- Levitt, B. & March, J.G. (1988) Organizational learning. *Annual Review of Sociology*, 14: 319-340.
- Ma, X., Delios, A. & Lau, C-M. (2015) Beijing or Shanghai? The strategic location choice of large MNEs' host-country headquarters in China. *Journal of International Business Studies*, 44 (9): 953-961.
- Maseland, R., Dow, D. & Steel, P. (2018) The Kogut and Singh national cultural distance index: Time to start using it as a springboard rather than a crutch. *Journal of International Business Studies*, 49 (9): 1154-1166.
- Morgan, G. (1998) *Images of Organization: The Executive Edition*. SAGE.
- O'Grady, S. & Lane, H.W. (1996) The psychic distance paradox. *Journal of International Business Studies*, 27 (2): 309-333.
- 齋藤泰浩・竹之内秀行 (2017) 「多国籍企業の立地選択に関する先行研究の検討：距離、経験、ダイナミック LOF」、上智大学経済学会ディスカッションペーパー、ERSS J16-01。
- Ronen, S. & Shenkar, O. (1985) Clustering countries on attitudinal dimensions: A review and synthesis. *Academy of Management Review*, 10 (3): 435-454.
- Schwartz, S. (1994) Beyond individualism/collectivism: new cultural dimensions of values. in Kim, U., Triandis, H. & Yoon, G. (Eds.) *Individualism and Collectivism*. SAGE (85-117) .
- Shenkar, O. (2001) Cultural distance revisited: Towards a more rigorous conceptualization and measurement of cultural differences. *Journal of International Business Studies*, 32 (3): 519-535.

- Shenkar, O. (2012) Beyond cultural distance: Switching to a friction lens in the study of cultural differences. *Journal of International Business Studies*, 43 (1): 1-17.
- Tobler, W. R. 1970. A computer movie simulating urban growth in the Detroit region. *Economic Geography*, 46 (2): 234-240.
- Tung, R.L. & Verbeke, A. (2010) Beyond Hofstede and GLOBE: Improving the quality of cross-cultural research. *Journal of International Business Studies*, 41 (8): 1259-1274.
- Yeganeh, H. (2011) A generic conceptualization of the cultural distance index: Application to Schwartz's and Hofstede's frameworks. *Journal of Strategy and Management*, 4 (4): 325-346.
- Zaheer, S. (1995) Overcoming the liability of foreignness. *Academy of Management Journal*, 38 (2): 341-363.
- Zaheer, S., Schomaker, M.S. & Nachum, L. (2012) Distance without direction: restoring credibility to a much loved construct. *Journal of International Business Studies*, 43 (1): 18-27.
- Zeng, Shenkar, Song & Lee, (2013) FDI experience location and subsidiary mortality differences in national culture and the expansion of Korean MNEs. *Management International Review*, 53 (3): 477-509.
- Zhou, N. & Guillén, M.F. (2015) From home country to home base: A dynamic approach to the liability of foreignness. *Strategic Management Journal*, 36 (6): 907-917.